

佐藤春夫 「田園の憂鬱」 論

——妻と作家の文学——

新 立 隼 也

第一章 はじめに

佐藤春夫の『田園の憂鬱』（新潮社、一九一九・六）の研究は、主人公「彼」の憂鬱の内実が主要な論点となってきた。しかし、従来の研究には不足している視点がある。たとえば高橋世織は、「主人公と他者^①とが、ほとんど対話らしい対話の成立する場のない^②」ことを指摘したが、むしろ他者である妻との対話の少なさ、食い違いこそが、「彼」の憂鬱を加速させているとは考えられないか。「彼」は、妻と打ち解けた夜には「俺には優しい感情がないのではない。俺はただそれを言ひ現すのが恥しいのだ」と漏らし、薔薇を摘んだ妻を叱った後には「妻がだんだん可哀想になつて居る」という。「彼」は妻への言動を反省し、妻の存在を強く意識している。妻は「彼」と同じ幻聴幻影を感じできないため、夫婦が理解し合うことは不可能である。「彼」はその不可能性を理解しており、理解し合えない妻との関係性が「彼」の憂鬱と深

く関わっているのではないだろうか。
本論文では、「彼」の妻への思いと、「彼」の望んだ、妻との関係性を明らかにしていきたい。

第二章 夫婦の生活への思考

「彼」と妻との関係性は、一章における妻の内言によく示されている。

あれほど深い自信のあるらしい芸術上の仕事などは忘れて、放擲して、ほんとうにこの田舎で一生を朽ちさせるつもりであらうか。この人は、まあ何といふ不思議な夢を見たがるのであらう《中略》他人に対しては、それは親切に、優しく調子よくしながら、何故かうまで私には気難かしいのである。《中略》あの人はきつと自分との結婚を悔いて居るのだ。少くとも若し自分とではなく、あの女と一緒に住んで居

たならばどんなに幸福だつたらうかと、時時、考へるに違ひない。(一章)

妻は「芸術上の仕事」にも「買つて貰つた自分の畑」にも手をつけない「彼」に不満を抱く。また「彼」の生活ぶりを、人生を朽ちさせる「不思議な夢」と捉え、その意図を理解しない。この無理解が、夫は結婚を悔いているという妻の妄想を誘引している。同章に「静に、涼しく、二人は二人して、言ひたい事だけは言ひ、言ひたくない事は一切言はずに暮したい住みたい」とあるが、妻が求めるのは夫婦の穏やかな生活そのものである。そのため妻は仕事である文学に励むことや精力的に田舎生活を営むことを夫に求める。妻は穏やかで活発な生活を送ることを良きこととする思考を持つため、夫の暮らしぶりが結婚への後悔、すなわち現在の生活の否定のように見えてしまうのである。

しかし、妻は夫を嫌っているのではない。他の女に思いを寄せているのかと心配するのは、自分にこそ親切に優しく接してほしいという若妻らしい感情があるからである。また妻は夫の生活に不満を抱く裏で「ほんとうに何か非常に寂しいのであらう」と憐憫の情を寄せ、「敏感すぎるこの人の心持も気分も少しは落着くことであらう」と思っている。妻は平穩に生活できない夫を憐れみ、夫の心の安定を望んでいる。そして「彼」も、実は、妻と同じく、「生活」を大切にしたいと考えていた。

皿を手につけて居て、皿の事は考へないで、ぼんやり外のことを考へる。《中略》生活を愛するといふことは、ほんとに楽しく生きるといふことは、そんな些細な事を、日常生活を心から十分に楽しむといふ以外には無い筈ではないか(十八章)

これは西洋皿を壊した妻を叱る「彼」の言葉であるが、「彼」は生活用品を粗末に扱う妻が生活を軽んじていると責め続け、その末に「妻に言ふつもりであつた言葉が、いつか自分に向つての言葉に方向を変へて」いると気づく。「彼」は妻を責めながら自分を責めている。生活を尊ぶことができないのは「彼」自身であり、妻を責めてしまうのは、生活に集中して楽しく暮らそうと強いて意識しているからである。

二十章で「彼」は、「おお、薔薇、汝病めり!」という声とともに「お前はなぜつまらない事に腹を立てるのだ。お前は人生を玩具にして居る。怖ろしい事だ」「お前は忍耐を知らない」という声を聞く。ここでも「彼」は無意識の声によつて「生活」に生きたれない自分を責める。生活を重んじ、そのために生きるべきだという妻と同じ認識を持つているからこそ、自分を責め、妻に厳しくあたる度には後悔してしまうのだ。「彼」にとつて「生活」や妻は大切にしたいものでありながら、自身の「性分」上、疎かにせざるを得ないものである。

第三章 「芸術の世界」と「憂鬱の世界」

この「彼」の「性分」を理解するため、「彼」の理想とする世界と田舎生活の中で陥った世界について考えてみたい。

十二章に「自然の上に働いた人間の労作が、自然のなかへ工合よく溶け入つてしまつて居る。何といふ美しさであらう！ それを見て居て、優しく懐しかった。おれの住みたい芸術の世界はあんなところなのだが」と「彼」が「フェアリー・ランド」と名づける丘を愛でる場面がある。ここで「彼」は林の中に草屋根を見出し、丘を「絵画的に、装飾的に見せ」るのは「自然のなかの些細な人工性が、期せずして、そのために最も著しい効果を与へられて居る」からだと考える。四章にも同じような場面があるが、このような自然の中に人工が溶け合う世界が、「彼」の理想とする「芸術の世界」である。

「彼」が美しさを感じるのは「人間の労作」や「人工の一縷の典雅」を発見したときだった。磯田光一は、巨万の財産相続の決まりそうな人物が理想の町作りを計画する佐藤の中編「美しき町」(「改造」一九一九・八・一二)が、ポーの「アルンハイムの地所」の影響下にあることを指摘し、「美しき町」における理想の町を、『田園の憂鬱』のうちに価値論的に肯定できるものだけを集めた人工庭園²⁾であると述べている。磯田は、佐藤が人工を美としたと考えたのだが、注意したいのは、「彼」の理想とする

「芸術の世界」が人工のみの世界ではないことだ。「彼」は「人間の労作」が自然の中にあることに「美しさ」を感じ、その混合の中に住みたいのであり、ポーと符合するのはむしろそうした美意識であろう。

「アルンハイムの地所」は青年が相続した遺産で理想の庭作りを行つていくという小説で、青年は「庭園のながめに純然たる人工を織り交ぜることによつて、その美観が大いに増大される」と語る。自然は人の手を加えることにより秀れたものになるというこの思考は、自然に侵されながら人工がある世界を「芸術の世界」とする、「彼」の美意識に通ずるものである。そう考えると、十八章の皿の場面で「人間の言葉では言へない事を言はうとしてゐる」という「日常生活の神聖、日常生活の神秘」とは、まさに自然の中に人工がある世界のことであり、「彼」は妻に自らの理想とする「芸術の世界」について、それが生活、神秘の両方を有する世界であることを語ろうとしたのだと解釈される。

しかし、「彼」は「憂鬱の世界、呻吟の世界、霊が彷徨する世界」に陥る。それは、ポーやブレイクの詩句、ダンテの巡った地獄、ゲーテの戯曲でファウストの訪れた精霊や妖精のいる世界³⁾、ダマンチオの『死の勝利』に登場する蛾や犬の幽霊、スピネロオ・スヒネリイの描いた悪魔、エル・グレコ絵画の肢体など、過去の芸術家たちの作り上げたイメージによつて構成される世界である。「彼」の陥った「憂鬱の世界」は、先人の「労作」により作られた人工の集合であり、『死の勝利』の犬を見、自らの口から

ブレイクの詩句を聞く段階に至っては、人工が自然を浸食しきつた、《生活》を見ることのできない、《神秘》一辺倒の世界となつてしまふ。ここで言う《自然》とは、景物だけでなく、妻との生活であり、娘を捜す村の若者の歩みや村祭りの太鼓の響きといった生活の現実の風景の美しさをも含む意味での《自然》である。《彼》はそういった自然（生活）の中に「芸術的因襲」を孕む人工の美（神秘）がある世界を当初「芸術の世界」として望んだが、実際の田舎に触れてその実現が絶望的であることに直面したのだ。

「彼」が聖フランシスに由来する名を負わせた犬を飼い、隣家が養鶏をするという対比に明らかなように、田舎の人間は《生活》一辺倒の世界に生きていた。隣人は鶏を殺した「彼」の犬を折檻し、酔漢は「打殺してやらあ」と言う。隣家の老細君は「野良仕事をしない」夫婦を「贅沢な生活でもして居る」と不愉快に思う。田舎の住人は「芸術の世界」に不可欠な《神秘》を否定し、《生活》のみの世界に生きることを強要する存在なのである。

一般の世間の人たちは、それなら一たい何を生き甲斐にして生きているか？ 彼等は唯彼等自身の、それぞれの愚かさの上に、さもしたりげに各の空虚な夢を築き上げて、それが何も無い夢であるといふ事さへも気づかない程に猛つて生きてゐるだけではないからうか（十六章）

「彼」は妻を含む一般の人々が《生活》のみに生き「芸術の世界」など許容しないという事実直面し、それらの人々が「愚か」に見え、その生き方ができるのはただ「猛つて」冷静さを欠いているからなのだと感じる。

「彼」の「性分」に論を戻すと、その「性分」とは自然と人工の同居する「芸術の世界」を求める志向のことである。それは自然のみの世界に生きる田舎の《生活》に、「芸術的因襲」を含んだ人工の美である《神秘》を求める志向であり、「彼」はそれを求めるあまり、妻や一般の人々がそれを許容しないことに絶望し、「憂鬱の世界」に陥るのである。

第四章 ファウストと「彼」

穏やかな生活の価値を知らながら神秘を求める者の苦悩や、過去の芸術に通じるためあらゆる風景に「芸術的因襲」を含む人工の美を見出してしまう人間の憂鬱は、古くから文学に描かれており、十八章で「彼」が読むゲーテの戯曲『ファウスト』にも描かれている。

現世以上の快楽ですね。／闇と露との間に山深くねて、／天地を好い気持に懷に抱いて、／自分の努力で天地の髄を掻き撈り、／六日の神業を自分の胸に体験し、／傲る力を感じつつ、何やら知らぬ物を味ひ、／時としては又溢るる愛を万

物に及ばし、／下界の子たる処が消えて無くなつて……
(十八章)

「彼」は不眠と幻聴幻影に悩まされ、自信をなくし、遠からず死ぬのではないかという空想に囚われる。そしてそれから逃れようと『ファウスト』を読み、「この田舎に來たその当座の心持」は、右の引用箇所のとおりだったと自覺する。

『ファウスト』第一部は、悪魔メフィストと欲望快樂を體驗する契約を交わした大学者ファウストが、少女グレートヘンに恋をし、嘘と悪魔の助けにより結ばれるが、發狂したグレートヘンがファウストとの子を殺めて処刑される、という悲劇である。

「彼」が讀んだのはファウストがグレートヘンの肉体への欲望や嘘に罪惡感を抱き、町を離れている際のメフィストの台詞である。このときファウストは欲望を忘れるため田舎の風物を楽しむとしてゐるが、メフィストはそれを「現世以上の快樂」だと當てつける。欲望を抑え、彼女を傷つけないために田舎で暮らすのは「下界の子」たる人間のすることではないと言ふのだ。このときのファウストの生活は、まさに「彼」が価値を認めるところの、妻との暮らしに生きる普通の生活者としての生活であり、この部分を読んで「彼」は自分がどうしようもなく生活に神秘を求めて妻に辛くあたつてゐること、その欲求を抑えることは人間である自分には不可能であることを悟つてゐると考えられる。

手短かに申せば、折々は自ら欺く快さを／お味ひなさるも妨げなしです。／だが長くは我慢が出来ますまいよ。／もう大ぶお疲れが見えてゐる。／これがもつと続くと、陽氣にお氣が狂ふか、／陰氣に憶病になつてお果てになる。／もう沢山だ…… (十八章)

この部分を読んで「彼」は、メフィストが「俺にものを言ひかけて居る」と感じ、欲望を抑えて自らを欺き生きることが長くは続かず、続ければ發狂か死だ、というメフィストの皮肉に共感する。グレートヘンの肉体への欲望は、「彼」にとつての「芸術の世界」への欲望、生活の中に神秘を求める心情である。また、グレートヘンの心や人格を尊重しようという理性は、「彼」にとつて妻との平穩な生活を望む思いである。ここで「彼」は欲望を抑えるからこそ「憂鬱の世界」に落ち、死すらも予感されると感じているのだ。

『ファウスト』に貫かれるのは肉体的快樂や美に取り憑かれ、その欲望のため愛するものを傷つけ失う人間の悲劇的性質である。第二部でファウストは美を求めて古代ギリシア世界へ旅立ち、女神ヘーレナの美に魅せられて恋に落ち、息子を授かるが、この息子もまたその悲劇的性質を有する。息子オイフォーリオンは自由、戦い、勝利への向上心を持ち、高みを目指して崖から飛び立ち、墜落死する。その後ヘーレナは死んだ息子の「この暗い國にわたしを一人で置かないで下さい」という声を聞き、姿を消

す。オイフォーリオンは自らの自由や向上心に取り憑かれた末、親子三人の田園生活を崩壊させてしまったのだ。

ヘーレナとオイフォーリオンとの田園生活においてファウストは家族の生活を守ろうとしたが、自らの向上心を受け継ぐ息子によつて破局を迎えた。ヘーレナは消える間際に「美と福とが一しよになつてはゐないと云ふ古い諺を、残念ながら此身に思ひ合せます」と、ヘーレナという美を手にながら幸福に生活することは元来不可能であることを告げる。こうした美と生活の相容れなさは、「彼」が「芸術の世界」に取り憑かれ、生活や妻を疎かにしてしまふ要因となつてゐるものに他ならない。

愛する者を大切にしようとして挫折する田舎生活という設定や、ファウストが求める美が過去の人工美である古代ギリシア世界の美であることなど、『ファウスト』と『田園の憂鬱』は響き合う。自由、戦い、肉体、美に取り憑かれ、愛する者を不幸に追いやる悲劇的性質を持つ人間の姿は「彼」が「芸術の世界」に取り憑かれ、妻や生活を疎かにする姿と重なり、「彼」の苦悩や憂鬱は『ファウスト』におけるそれと同種のものであると言える。「彼」は『ファウスト』を読み、自分もそれと同種の悲劇を招きつつあると感じてゐるのだ。

第五章 「彼」の理想の妻

『ファウスト』の最後には、ある救いがある。ファウストは死

に際し天上のグレートヘンの祈りにより、あの世でメフィストに魂を捧げるという契約から解放されるのだ。

『田園の憂鬱』には、エピグラフとしてポーの詩「ユラーリー」の一部が引用されるが、この詩も女性による救いを歌つたものであるということは興味深い。

エピグラフには、「私は、呻吟の世界で／ひとりで住んで居た。／私の霊は澱み腐れた湖であつた」という冒頭部が引用されているが、詩は、「ついに麗わしくて優しいユラーリーが／羞じらいがちの花嫁となつてくれた——／ついに金色の髪のユラーリーが／ほほえむ花嫁となつてくれた《中略》もはや疑いも——苦痛も／二度とこないのだ／なぜなら彼女の心はほくのため息をなぐさめて／一日じゅう／強く明るく照つてゐるのだから」と続いていく。

「ユラーリー」に歌われるのは、美しい娘に会つて私は救われたというテーマであり、引用されたのはユラーリーと結婚する前を歌つた箇所である。この詩は病の妻と義母と共にニューヨークに暮らしていたポーが妻を思つて書いたとされている。ポーはその後郊外へ移り、二四歳の妻を失うが、この詩では「ため息をなぐさめて」「呻吟の世界」から救つてくれる「ほほえむ花嫁」として妻を歌つた。

不幸の中にある妻が、何かに取り憑かれた夫の幸福を健気に願ひ、そして救う。このイメージは『田園の憂鬱』の妻とは程遠いかもしれない。しかし「彼」はこの女性のように健気に夫を思い

「呻吟の世界」から救ってくれる〈妻〉を理想として持ったため、自分の理想を理解せず受け容れない妻に苛立ち、辛くあたたたのであらうと考えられる。

また、理想の〈妻〉像は、十七章「彼」の幻想として表れる。目を開けて寝ていた「彼」は夢うつつの中で、妻の足に「王禪寺の方へ遠足した時、道に迷ふて這入つて行つた家の糸とり娘」の足を見出す。「彼」は「淋しく、つつましく糸を紡いで居る」「美しい小娘」のものと思つていた綺麗な足が妻の足であつたと知つて怒りだが、「彼」の理想の〈妻〉は、このときの「糸とり娘」のような、いつも家にいてつつましく仕事に励み夫を支える〈妻〉であることが分かる。

それ等の幻影は、すべて彼の妻の都会に対する思ひつめたノスタルヂアが、恐らく彼の女の無意識のうちに、或る妖術的な作用をもつて、眠れない彼の眼や耳に形となり声となつて現はれるのではなからうか（十六章）

「彼」は電車や活動写真の囃子の幻聴や東京の幻影が、妻の東京への「ノスタルヂア」から伝わってくるものだと考える。十三章では寵の炎に、人混みの中の妻の幻影を見、「ああ活動へ行つて居るな！」と直感してもいる。「彼」は妻が東京に帰りたいのだと決めつけ、自分の幻聴幻影の原因もその物思いにあるとまで思ひこむ。「彼」は、妻の東京への執着や女優業への未練を、始

終嫌っているのである。

東京にとらわれることは妻が「彼」との田舎生活に不満で、「彼」に尽くす気持ち薄いからだと「彼」には感じられる。それは「芸術の世界」に住みたい「彼」にとつて、妻は人工の美を理解できず、神秘のある世界に生きる夫との淋しい生活を否定していることを意味する。「彼」は、あるときは安い皿も大切にしろと生活を重んじることを要求し、あるときは薔薇を全て摘んできたことに怒り、神秘について理解することを求める。「彼」は生活に神秘を求めて妻を傷つけ苦悩するが、一方で、その苦悩から救い、「芸術の世界」実現を助けてくれる存在としても妻を見ていた。「彼」が求める〈妻〉像は傷つけられようとも夫の苦しみを理解し、耐え、夫との生活に尽くす〈妻〉であつたと考えられる。

第六章 まとめ

「芸術的因襲」に通じ、風物に過去の芸術の美を見出す感性を持った「彼」は、自然の中に人工がある世界を〈美〉とし、生活の中に神秘が共存する「芸術の世界」を理想として求めた。そしてその欲望を追求し、避けがたく愛すべき者を疎かにする『ファウスト』のような悲劇的性質を有していた。「彼」はまた普通の生活者として生活に生きる価値を認めてもいて、自分が生活のために何もできないことを自省し、妻に穏和に接したいとも望んで

いた。「彼」は自分の性分のために、いつも傷ついている妻を不憫に思っていた。

一方で「彼」はグレートヘン、ユーラリ、糸とり娘のような、つつましく夫が招いた不幸に耐え、夫の幸福を願う〈妻〉を望んでいた。「芸術の世界」の実現は、唯一「彼」が生活していくことのできる道であるがゆえに、途上で傷つくとしても妻は夫の幸福のために耐え、その実現を願ってくれることが望ましいとも思っている。

しかし、現実の妻は生活のために仕事に励むことを夫に求め、夫の救いや幸福を願うどころか、以前自分がいきいきと生活した東京を思い、女優業に多大な未練を持っているように見えた。田舎の人々と同じく妻も〈生活〉一辺倒に生きる「一般の世間の人たち」に過ぎなかったのだ。人々は「彼」に生活に生きることを強要し、「芸術の世界」を許容しない。「彼」は妻が自分の理想を理解せず、否定する側の人間であったことに直面し、深い憂鬱に陥っていく。「彼」は妻に対して不憫さを感じつつ、一方でこの妻は自分を救ってくれる妻ではないと失望していたのである。

五章で「彼」は、庭先の痩せた薔薇の木に「日光の恩恵を浴びせてやりたい」と日光を遮る枝を伐り、続けて伸び放題の草木を剪伐していく。ここで「彼」は〈自然〉の浸食ききった庭に自らの手で〈人工〉を加え、「芸術の世界」を作ろうとしている。庭仕事という行為は「芸術の世界」を作ることの象徴だ。この日「彼」は珍しく大食し、熟睡を貪り得るが、この生活の自然な喜

びは、日中の庭仕事による「芸術の世界」の仮の実現によってもたらされたものだ。この場面は「深い眠」を求めて田舎を訪れた「彼」が熟睡という安息を得、妻を大切にすること余裕を持つて暮らすには、やはり「芸術の世界」が不可欠であることを象徴的に示している場面である。

「芸術の世界」を優先し、妻を疎かにする「彼」だが、妻を大事にして生活を慈しむためには、「彼」に救いと安息をもたらし「芸術の世界」に住まなければならない。妻との穏やかな生活はそこの先にはなかったのだ。また、「彼」にとつて「芸術の世界」は「美」であり、その実現はその「美」を作品に昇華し、作家として妻との生活を支えていくことにも繋がる。「彼」はまず「芸術の世界」を実現し、作家として生活力を手に入れ、妻を大切にしながら生活をも支えていきたいと考えていたのではないか。「彼」は「芸術の世界」実現の先の地平に、作家として真に穏やかな妻との生活を望んでいたのである。

注

(1) 高橋世織「田園の憂鬱」論(『日本近代文学』第29集、日本近代文学会、一九八二・一〇)

(2) 磯田光一「田園の憂鬱」の周辺―鹿鳴館の系譜(7)―
「文学界」昭和五十七年八月号、文藝春秋社、一九八二
・八)

(3) ポー／ホーソーン、松村達雄／太田三郎訳『黒猫／モルグ街の殺人／他 緋文学』河出世界文学全集第5巻（河出書房新社、一九八九・一〇）

(4) 前出の「おお、薔薇、汝病めり！」はブレイクの「病める薔薇」の一節。

(5) エルフ（妖精・精霊）が登場し、合唱する場面がある『ファウスト』を挙げたが、井村君江は「佐藤春夫とオスカール・ワイルド」（成瀬正勝編『大正文学の比較文学的研究』、明治書院、一九六八・三）でツルゲーネフやアナトール・フランスを思わせると指摘した。

(6) 犬の幽霊の類似については井村君江「佐藤春夫とオスカール・ワイルド」（前掲）で指摘されているが、『死の勝利』にはランプの周囲を飛ぶ悪魔のような蛾を捕えようとするという場面もある。

(7) ゲーテ、森林太郎訳『ファウスト 第二部』岩波文庫（岩波書店、一九二八・九）

(8) ポー、加島祥造編『ポー詩集』岩波文庫（岩波書店、一九九七・二）

付記 作品の本文引用は、『佐藤春夫全集 第三巻』（臨川書店、一九九八・四）に依った。引用文中における「」は改行を示す。

（しんたて・としや 本学卒業生）